



きいむんの どら〜ちゅいむにい〜 - 第6回 - テーマ 冊封七宴

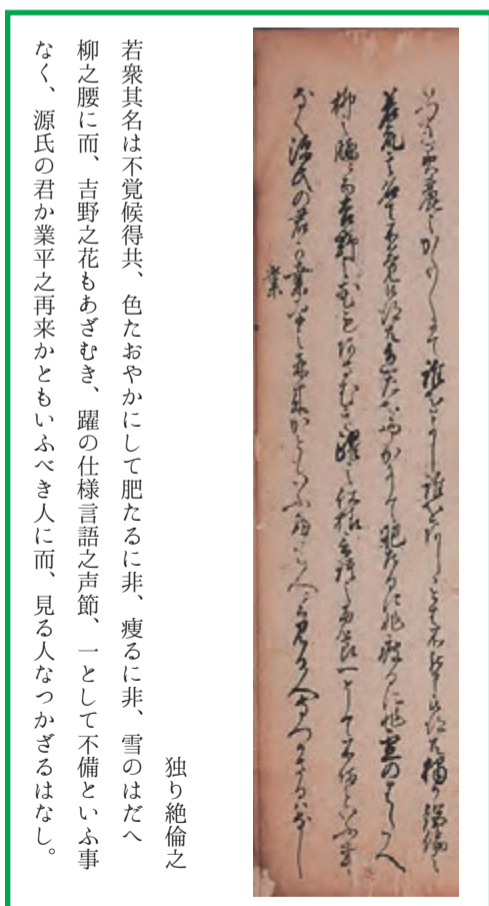
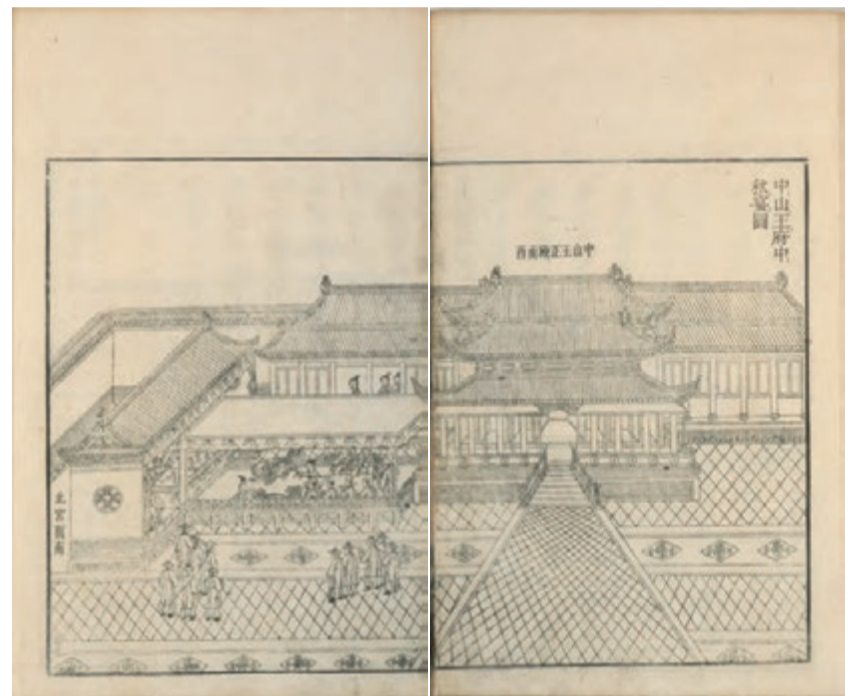
ハイサーイ。きじむん やいびーん！ 読書の秋、きじむんは歴史にはまっています。琉球の歴史は雄大で謎も多くておすすめです。

琉球の歴史のなかで、冊封は大きな出来事です。中国皇帝が使者を派遣して、琉球国王を任命します。琉球では、1404-1866年までの長い冊封の歴史のなかで、代替わりのたびに中国から冊封を受けました。

冊封使の一行は、500名前後の人数で琉球にやってきます。正使1人、副使1人、を頂点としています。冊封使は、季節風の航行のため、5月頃から11月頃まで琉球に滞在します。

その間に、七宴と呼ばれる公式行事があります。諭祭宴(ゆさいえん)、冊封宴(さっぽうえん)、仲秋宴(ちゅうしゅうえん)、重陽宴(ちょうようえん)、餞別宴(せんべつえん)、拝辞宴(はいじえん)、望舟宴(ぼうしゅうえん)です。

そのうちで、芸能が冊封使に供されるのは、仲秋宴と重陽宴からです。世界遺産にも登録された組踊は、1719年の重陽宴のときに初めて上演されたものです。



若衆其名は不覚候得共、色たおやかにして肥たるに非、瘦るに非、雪のはだへ柳之腰に而、吉野之花もあざむき、躍の仕様言語之声節、一として不備といふ事なく、源氏の君か業平之再来かともいふべき人に而、見る人なつかざるはなし。

独り絶倫之

冊封使を迎えて接待のため芸能上演を管理する臨時役職が、踊奉行を筆頭とする踊方(おどりほう)です。数百人が在籍し、芸能の運営管理や上演までを一手に引き受けていました。

その舞台裏をちょっとのぞいてみましょう。予算が足りないとか人手が足りないとか、10人に1人がやめていってしまうとか、鹿児島から買ってきた布の模様が手違いだったので予定通りの衣裳が縫えない！とかハプニングもあったようですが、おおむね順調にこなしていたようです。悲喜こもごもを知りたいかたは、尚家文書『冠船躍方日記』(1839年成立)をみてね！

演者も奏者もスタッフも全て士族の男性が行いましたが、演者の美少年の美しさといったら筆舌に尽くせないほどだったようです。垣間見える『崎山之御園一件』(仲原善忠文庫)を見てみましょう。雪の肌に柳の腰、などと若衆を絶賛しています。

琉大附属図書館のホームページから、デジタルアーカイブ、BIDOM、iXiOを使ってキーワードで検索してみてくださいね！
面白い文献がいくつもひっかかりますよ。(沖縄資料担当S)

《参考文献》

- 『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社 1983年
- 尚家文書『冠船躍方日記』1839年
- 『崎山之御園一件』(仲原善忠文庫)
- 徐葆光『中山伝信録』